県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima
地域連携センター報 Vol.19
COMMUNITY LIAISON CENTER
平成26年10月30日発行
県立広島大学地域連携センター
〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

シンポジウム「ナショナリズムとの対話～広島から考える東アジア」

冷戦終了以降，東アジア情勢が最も緊迫している現在，市民がこの事態をどう考え，対処すれば良いのでしょうか。その手がかりを探るために7月21日にシンポジウム「ナショナリズムとの対話～広島から考える東アジア」（県立広島大学地域連携センター主催，中国新聞社等後援）を開催しました。来場者は91名でした。司会は国際関係論が専門の西田竜也広島市立大学准教授，パネリストは中国近現代史を研究する丸田孝志広島大学教授，朝鮮半島に詳しい福原裕二島根県立大学准教授，台湾社会を専門とする上水流久彦本学講師でした。

広島県内の複数の大学教員の連携のもと行われたため，地域連携センターの「地（知）の拠点整備事業」（重点事業）の一環として行いました。

司会者，パネリストの共通認識は，中国の国力増大に伴う日本との低強度の緊張関係の長期的持続，中韓の関係強化の進行でした。冒頭，西田（以下敬称略）が竹島や尖閣諸島の問題の本質は何かと問いました。それに対し，歴史に基づくナショナルプライドの問題，またはアメリカへの対抗の道具にされているという見解が示されました。かつ，解決が一層困難になっている点で一致しました。

丸田は天安門事件に参加した世代が中国社会の中枢となり，ナショナリズムを超えて対話できる状況もあると述べました。さらに，歴史認識の点では一部の幹部軍人に責任を負わせた日本の戦後処理も考えるべきだと指摘しました。福原は，日韓は隣接しているからではなく意志や理由に基づき付き合う時代になったが，今のところ，その理由がないのが現実だと厳しい指摘をしました。また現地情報を踏まえて，北朝鮮の金正恩体制は安定しており，すぐには崩壊しないのではないかと述べました。上水流は東アジアを考える場合，日中韓に加え台湾も必要だと指摘しました。また，研修や観光で日本を訪れた人々が人の親切さや街の美しさに感銘し，日本を好きになる事例を挙げ，軍事力や経済力とは別にグローバル化の時代，市民の「日常の力」が重要なナショナルパワーになると述べました。最後に西田は各国の人々との議論から，広島が非核の象徴・被爆地ヒロシマとしてだけでなく，軍都としての加害責任との関係，さらに今なお紛争に苦しむ国や地域にとっては復興を遂げた希望のシンボルという幅広い意味を持っていることに気付き，行動すべきとまとめました。フロアからはこれらの意見に異論も出ましたが，最後には観光も含めた市民交流の重要性の点で一致しました。

広島キャンパス HIROSHIMA CAMPUS

地域連携

〈江田島市〉

平成25年度地域戦略協働プロジェクト事業

平成24年度より継続実施中の「江田島の観光資源開発」事業の成果として，江田島観光マップ「島に恋」を作成しました。このマップは，本事業に参加した学生４名が，２年間にわたり江田島市内を巡って見つけたさまざまな名所や，地元の方々との交流を通して集めた，訪れたくなる街のスポット等の情報が満載の観光情報マップとなっています。また，学生自らが企画提案した江田島の観光コースもあり，学生目線で江田島の魅力を発信しています。本マップは江田島市内の港や広島市内の主な観光案内所等で配布しています。

また，本マップの完成に合わせ，担当した学生４名が４月14日に田中達美江田島市長を表敬訪問して事業成果の報告を行いました。作成中の苦労話や地域の方々との交流のエピソード等も飛び出し，予定時間を超過するほど充実した報告となりました。

〈広島市南区〉

地域連携協力に関する協定の締結

２月28日，広島キャンパスが立地する広島市南区と，地域の発展とまちづくりの推進に寄与することを目的として，連携協力に関する協定を締結しました。南区役所において，住田雄二南区長および中村健一学長をはじめとする関係者が臨席して調印式を行いました。

具体的な目標としては，南区が推進する「より良い地域社会の実現」をめざした取り組みを協働で企画・実施することや，以前から本学が取り組んできた「健康，長寿，食育」に関する活動を共にサポートしていくことを挙げています。具体的な連携事業は本年度より開始しています。

公開講座

「スマートフォン活用塾」

５月10日から24日にかけて，３回にわたり，スマートフォン利用者を対象とした情報スキルの基礎養成講座を開講しました。ユーザー参加型情報収集システム，震災時のための情報共有，安心・安全なアプリケーション等について解説を行いました。「スマートフォンの多面的な活用方法を学ぶことができてよかった」，「スマートフォンの扱い方を見直してみようと思った」等，受講者の感想が寄せられました。

「健やかな食生活をめざして」

健康科学科３年生の給食経営管理実習の成果を，公開講座として地域の人々に提供しました。当日は3年生全員が調理，運営等に参加し，グループリーダーたちが薄味でおいしい食事を楽しむためのヒントなどを説明しました。また，その後，グループに分かれて受講者といっしょに食事をしながら質問に答えました。受講者には「塩分が控えめだとおいしくないという先入観があったが，おいしくてびっくりした」，「若い人たちとの食事は笑いがあり，楽しかった」，「頑張っている学生の姿を見ることができた。地域密着型の大学として，いい企画だと思う」等，たいへん好評でした。

「広島を見る，広島から見る」

５月から７月にかけて，６回にわたり，広島県立図書館連携公開講座を開講しました。平成23年度に始まったこの連携講座は今年で５回目を迎えました。看板や標識から考える広島の言語状況，ひろしま神楽と地域振興，広島の酒，スポーツを活用した街づくり，児童文学，移民をテーマに本学と広島経済大学の教員が講義を行いました。

「ひろしま学を考える」

広島市立大学との連携公開講座「ひろしま学を考える」を昨年度に引き続き，開講しました。広島という地名の由来，広島の芸能，江戸時代の商業出版の展開と城下町広島の文化的土壌，広島の伝統産業と革新的事例，広島の伝統工芸のテーマで，延べ600名の方々が受講されました。

研　究　紹　介

キリスト教用語に関する総合的研究

人間文化学部国際文化学科 准教授　小　川　俊　輔

歴史の教科書で習った「キリシタン」や「バテレン」，若い女性たちが好んで身に付ける「クルス」（十字架）のネックレス，数年おきにブームになる「スピリチュアル」，これらはすべて16世紀末から17世紀初頭にかけて，ザビエルら西欧のキリスト教宣教師が日本に伝えたキリスト教用語です。

私は，これらの語の受容・変容・土着の歴史の解明を目的に，研究を進めています。2003年以来，九州地方300地点における現地調査，南米ボリビアのサンフアン日本人移住地への訪問調査などを行ってきました。他方，16世紀末期頃からキリスト教宣教師が福音宣教のために編纂・出版した「キリシタン文献」や，幕末明治期に長崎で出版された「プチジャン版」と呼ばれる，ラテン語とポルトガル語で彩られた宗教書などの調査研究も行っています。

たとえば私たちは，蒸し暑い屋外から冷房の効いた涼しい部屋に入ったとき，「ああ，天国だ！」などと口にします。しかし，この「天国」という言葉は，明治時代の『聖書』翻訳の中で初めて登場する歴史の浅い言葉なのです。その後，しばらくキリスト教徒専用の言葉だったのですが，次第にキリスト教性が薄れ，やがて宗教性も薄れ，一般に広く用いられるようになったのです。ちなみに，「キリシタン文献」によると，16世紀のキリシタンたちは「天国」のことを「パライゾ」と言っていたようです。

日韓の情報家電企業の技術開発戦略に対する比較研究

経営情報学部経営学科 准教授　朴　　唯　新

皆様はイノベーション（Innovation）という言葉をよく耳にすると思います。イノベーションとは，一般には「何か新しいものを取り入れる，既存のものを変える」という意味をもちます。日本ではイノベーションが1956年の『経済白書』で「技術革新」と翻訳され，技術のみに注目されてしまいましたが，より広い意味を持っています。例えば，広義のイノベーションとは，新しい財・サービスの創出，既存の財・サービスを生産するための新しい生産技術や，それらをユーザーに届け，保守や修理，サポートを提供する新しい技術や仕組み，さらにはそれらを実現するための組織・企業間システムやビジネスのシステム，制度の革新などを含む新結合です（Schumpeter, 1934; 一橋大学イノベーション研究センター，2001）。

私の専門分野は経営戦略論や技術経営論（MOT; Management of Technology）であり，それらの観点から日韓の情報家電企業のイノベーション戦略について比較研究を行っています。皆様もご存知のように日本の情報家電企業は，以前強い国際競争力を保持していましたが，近年，ソニーやシャープのように経営不振に陥った企業も多く見られます。それは当該企業が技術革新（狭義のイノベーション）をおろそかにしていたからではなく，新興国などの新市場の登場・競争環境の変化の中で，きちんとした利益をあげるため（価値獲得）に必要な，高度に戦略的な考え方やマネジメント（広義のイノベーション）を構築できなかったからです。現在のグローバル競争下では，今までの日本企業の強みである，優れたものを低コストで開発・製造すれば，企業の業績に結び付くという単純な図式ではなくなりました。そのため，製造業が国際競争力の牽引役にもなっている日本では，製造業に特化した経営学である技術経営論が重要です（延岡 2006）。

このような問題意識を持ちながら，日韓（ソニー，パナソニック，シャープ，サムソン， LG）の情報家電企業のイノベーション戦略（主に各社の特許データの分析）について比較検討しています。この分野に関心がある方からのご連絡をお待ちしています。

【参考文献】

J.A. Schumpeter（1934）*The Theory of Economic Development: An Inquiry Into Profits, Capital, Credit, Interest, and the Business,* Transaction Publishers.

一橋大学イノベーション研究センター（2001）『イノベーション・マネジメント入門』日本経済新聞出版社

延岡健太郎（2006）『MOT“技術経営”入門』日本経済新聞出版社

庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

産学官連携総会

「しょうばら産学官連携推進機構」

当機構の本年度総会が５月26日かんぽの郷庄原にて開催されました。約30名の出席者のもと，すべての議案について原案どおり承認されました。途中，昨年度当機構のマッチングにより開発された新商品の試食会も行い，終始和やかな雰囲気で執り行われました。今年度の事業方針は，設置目的である「活力ある地域を創造する」ためにマッチング事業を重点的に展開していくこととしています。また，学生との連携を強化し，新たに「学生協働プロジェクト」等学生と連携した事業を実施します。

「三次イノベーション会議」

５月29日に三次市内のホテルにて当会議総会を開催しました。本会議は，三次市，三次商工会議所，三次広域商工会，本学が構成員となった産学官連携のための組織です。総会では原案どおり承認されると同時に，メンバーで情報の交換を行いました。今年度は本学との連携を行う企業等に例年どおり助成をするとともに，県北での類似した産学官機関との連携を深め，さらには本学教員が求めに応じて企業に出向き，講座を実施する予定です。

公開講座

本学主催の公開講座『成分分析の基本的考え方とその応用』が７月24日に本学教員２名を講師に開催されました。成分分析を活用した商品開発は現在盛んに行われており，本学でも様々な共同研究，受託研究が行われています。ただ，成分分析についての理解が進んでいないこともあり，今回の開催となりました。今後，本学との研究を活用される組織等を対象にこの講座を継続して行く予定です。22名の参加があり，18名に修了証書が授与されました。

回	講　座　名	講　師
1	成分分析とは何か ―基本的考え方	生命環境学部 西 村 和 之 教授
2	成分分析の実際 ―できること･できないこと―	生命環境学部 吉 野 智 之 准教授

庄原市教育委員会共催市民公開講座

庄原市教育委員会と本学が共催する県立広島大学市民公開講座『大学が地域にできること』が，６月19日から７月17日の期間に４人の講師によって実施されました。大学には地域に開かれたセンターがあり，今回はその活動を市民の方と共有することを目的としました。延べ参加人数は94名で，23名が修了証書を授与されました。後期には大学の農場施設等を活用した講座を実施する予定です。

講座風景（第２回目）

回	講　座　名	講　師
1	地域連携センターの 地域貢献とその研究	地域連携センター 西 川 洋 行 准教授
2	附属診療センターの 地域貢献とその研究	保健福祉学部理学療法学科 大 塚　　彰 教授 積山 和加子 助教
3	宮島学センターの 地域貢献とその研究	宮島学センター 大 知 徳 子 助教
4	フィールド科学教育研究 センターとその研究	フィールド科学教育研究センター 主任(兼)生命環境学部 甲 村 浩 之 准教授

JICA研修

「中小企業振興政策（C）」として，アルバニア（１名），アルメニア（１名），ボスニアヘルツェゴビナ（１名），グルジア（１名），モンテネグロ（１名），セルビア（１名），マケドニア（３名）の７か国，９名の参加があり，５月29日～７月10日の日程で実施されました。研修では日本の中小企業振興，金融システムの理論や世羅町，庄原市，三次市，広島市などで第三セクター，産学官連携，６次産業，道の駅や中小企業大学校の制度等について学び，県内各地の企業を視察しました。産学官連携，第二次創業の金融支援政策，人材育成などに研修者は強く関心を持ちました。６月２日に中村健一学長を表敬訪問しました。また，当日にはカントリーレポート（各国の状況に関する）発表会を，７月８日にはアクションプラン報告会を広島キャンパスで行い，本学の教員・学生も参加しました。本学からは野原建一名誉教授，吉野智之生命環境学部准教授らが講師を務めました。

研　究　紹　介

我々はどのようにして多細胞体へ進化したか

生命環境学部生命科学科　准教授　菅　　裕

「動物多細胞性の進化」をテーマに研究しております。私たち人間をはじめとする動物のからだは多数の細胞から成り立っているわけですが，数億年前，私たちの祖先はひとつの細胞のみからなる単細胞生物でした。それがあるとき複数の細胞が寄り集まったものになり，それが徐々に複雑に進化して今の私たちがあるわけです。これが生命史上いかに大きな出来事であったかは，現在の多細胞動物の複雑な体のつくりや行動から見ても明らかです。ただし多細胞化は，単細胞の時代には考えられなかったような問題も生み出しました。細胞の増殖が制御できなくなる病気である癌はその一つです。また，私たちを襲う重大な病気の多くが，単細胞の卵から多細胞へ成長し，大人になる過程で起こります。これは「発生」と呼ばれる非常に複雑なメカニズムで，ミスなく完遂するのは至難の業なのです。私たちは複雑になりすぎてしまった，と言えるかもしれません。

私の研究室では，「動物が単細胞から多細胞へと進化したとき一体何が起きたのか」を分子レベルで解明することを目指しています。対象は，動物に非常に近い親戚でありながら未だに単細胞に留まる，小さなプランクトンです。これらのゲノムを解読した結果，色々と興味深いことが明らかになってきています。伝統的な分子生物学と，コンピュータを使ったゲノム解析（バイオインフォマティックス）を駆使して，動物多細胞化の謎に迫りたいと考えています。

植物を構成する循環型高分子の化学的活用

生命環境学部環境科学科　准教授　青　柳　　充

植物は光合成により二酸化炭素を濃縮・固定して細胞壁を形成し植物体を支えています。時が来るとその構造を解放し様々な役割を果たしながら二酸化炭素へ戻る，壮大な炭素循環を支えています。当研究室ではこのような循環型炭素である植物構成高分子の化学的な活用と解析を行っています。植物細胞壁は脂肪族高分子であるセルロース，ヘミセルロース，そして芳香族高分子であるリグニンが分子レベルで絡まり形成されています。これらの成分を高収率で単離し，高付加価値素材への適用を目指しています。特に非食，未利用，長期循環資源であるリグニンの化学修飾，解析と利用を検討しています。生態系中ではリグニンの循環に要する時間は1000年を超えるといわれており，その長期循環を制御する化学構造が細胞壁の形成段階で決定されています。その循環性を支える化学構造や物理化学的要因を考察し素材への適用を検討しています。具体的には芳香族成分の光励起／緩和過程と構造／エネルギー相関から，光化学電池，導電性複合体や循環型の医薬・電子・複合樹脂素材への適用を目指しています。現代の文化的な生活を支える素材を循環型炭素から調製し活用することが目標です。化石資源が豊富に存在する間に，より複雑な複合体である生物資源を効率よく活用する方法を考え，熱利用，木材，紙パルプと並ぶ，新しい農林業と化学工業をつなぐ資源の使い方を化学的なアプローチで検討します。

地域連携　地域には宝が埋まっている ～蔵出し梅酒ケーキ～

日本では，食品の多くが食べられずに廃棄されています。今回は，廃棄されるのを待つしかなかった梅酒の梅のお話です。比婆美人酒造株式会社（庄原市三日市町）の「梅酒の梅があまっとる」の一言から始まりました。しょうばら産学官連携推進機構や本学庄原地域連携センターから話を頂き，アルコール度が１%以下になり梅酒の香りが残っているような試作品をいくつか作製し，比婆美人酒造（株）との打ち合わせを繰り返しました。その後，「おいしい」と言われた梅酒ケーキの試作品を持ち，株式会社和泉光和堂の米麦工房２１めぐみ（庄原市新庄町）へと相談に行きました。プロが試作を重ね，そのたびに，梅酒ケーキのアルコール度の分析を行いました。その間，パッケージングや価格の検討を行いました。その結果，生まれた商品が，「蔵出し梅酒ケーキ」（写真）になります。現在，食彩館ゆめさくら（庄原市新庄町）で販売されています。

（生命環境学部生命科学科・准教授　吉野智之）

三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

国際交流

ドイツ・NRWカトリック大学との国際学術交流

本学はドイツのNRWカトリック大学と2010年９月に学術交流協定を結びました。学術交流協定締結前後から，本学とNRWカトリック大学の学生・教職員の国際学術交流が毎年，活発に行われてきました。

７月16，17日に，NRWカトリック大学のシーラ－バイリッヒ(Schirra-Weirich)副学長を団長として６名の学生・教員・画家が本学を訪れました。16日は，広島キャンパスで中村健一学長への表敬訪問，教職員との交流会を行い，日独の大学教育の事情，文化や生活，国際学術共同研究などについての情報交換を行いました。17日は，午前中に三原市内の老人ホーム，保育所，知的障害者パン販売事業所などの社会福祉施設訪問・見学，池本勝彦三原市副市長への表敬訪問を行い，社会福祉関係者と日独の社会福祉についての意見交換を行いました。午後は，保健福祉学部の国際交流委員と昼食会があり，それぞれが自己紹介の後，三原キャンパスの教員から日本の印象等について質問が行われました。その後，人間福祉学科の学生50名，教職員との交流会を行い，日独の大学教育，実習教育，学生生活，就職などについて意見交換を行いました。交流会の終了時には，人間福祉学科の学生からささやかなお土産が訪問団一人ひとりに手渡され，皆さん大変感激されていました。

訪問したドイツ人学生の一人は，「ドイツから遠く離れ，文化，言葉の全く異なる日本に来るのは不安だったが，学生や教員がとても親切に応対してくれて嬉しかった」と語っていました。一方，人間福祉学科の学生は「将来，是非ドイツの社会福祉施設や大学を訪問し，国境を越えた友情をドイツ人と築きたい」と述べていました。

今回，訪問団のなかに魅力的な絵を描く画家（31歳）がいらっしゃいました。この方は，いじめや不登校などの体験から対人恐怖症となり，長年，引きこもりの状況にあったようです。しかしながら，絵を描くことで不安の感情が治まり，対人恐怖症を克服されたそうです。この方がドイツから持参した絵画25枚を保健福祉学部附属診療所の入り口で展示することになり，職員と学生が絵画展の準備作業を一緒に行いました。絵は，自然のなかで子どもや動物が登場し，楽しい場面を想像させる温かみのあるものです。この絵画展は，新聞やテレビで報道され，大きな反響がありました。

17日夕方，三原キャンパス食堂でささやかな懇親会を開催し，約30名が参加しました。両大学の教職員・学生との交流・友情を深め，貴重な時間を過ごすことができました。

最後に，訪問団代表のバイリッヒ副学長は次のように語っていました。「県立広島大学，中村健一学長を始めとする教職員・学生の温かいおもてなしに，広島という土地で我々は一生忘れることのできない思い出を持つことができました。今後も県立広島大学とは，国際交流を続け，学術的共同研究を進め，国際平和社会に貢献できる人材をお互いに協力し，育成したいと考えております」。

（保健福祉学部人間福祉学科 教授　三原 博光）

地域貢献

リカレント事業

７月３日に三原市保健福祉課の母子健康推進委員初任者研修がリージョンプラザで開催されました。「リカレント」とは循環・回帰の意味がありOECD(経済協力開発機構)の提唱する生涯教育構想で，「社会人が必要に応じて学校へ戻り再教育を受けること」と辞書にあります。そんなわけで４月に辞令をもらった新任の母子健康推進委員の方たちと経験者40人余りが一緒に，学びなおしの意味で，「家庭訪問時の傾聴」の研修を行いました。

一般に「きくこと」は発表したり話すこととは違い，簡単にできると思われている節があります。これからカウンセラーになるわけではないにしても，相談業務の中では傾聴の技術は大きな位置を占めます。

三原市の委託を受けた本郷・久井地区等を含む三原市内の母子健康推進委員は，２，３人目の赤ちゃんを出産して間もないお母さんがいるご家庭へ訪問する一般の方々で，おおむね子育てを終了した女性です。子育ての困りごとや苦労しているお話を伺い，共感しつつ何を必要としているか個々のニーズをくみ取り，公的サービスの紹介や保健師・医療職に繋げる役目を担っています。

訪問して，お母さんたちにこの人なら話せると思ってもらうにはどんな聴き方が良いのか，共感するとはどういうことか，主として実際にお互いのことを話す・聴くことを体験する研修内容としました。傾聴してもらう心地よさを体験し，その心地よさを提供できるよう，傾聴の態度，言葉の選び方，気持ちをくむことに重点を置きました。

40人の話すパワーは強烈で笑顔が絶えず，時間の都合で話の腰を折るのがためらわれる熱心さでした。自分の人生経験を基にしてついついアドバイスの押し付けにならないよう，傾聴する姿勢を持って信頼関係を作ってもらえたら，と願っています。

（保健福祉学部看護学科 准教授　吉田 なよ子）

研究紹介

心も身体も健康であるための研究 ― 健康寿命延伸を目指して ―

保健福祉学部理学療法学科 准教授　飯 田 忠 行

現在，「メンタルヘルス」と「骨密度」の２つのテーマで研究を行っています。厚生労働省の調査によれば，仕事や生活に関する強い不安・悩み・ストレスがある人の割合は６割を超える状況にあり，メンタルヘルスの対策が最も重要な課題となっています。メンタルヘルスの問題としてはうつ病が多く，男女比は1：2と示されています。したがって，特に女性において，うつ病にならないよう，うつ病の前段階である抑うつ症状を早期発見し，支えあうことが大切です。ストレスや抑うつ症状は，睡眠も関連します。そこで，抑うつ症状と酸化ストレスマーカー等の生体指標との関連，睡眠と生理機能・生体指標との関連を検討し，抑うつ症状の早期発見を目指しています。

一方，中高年女性を対象に，生活習慣と骨密度の関係に関する縦断的調査を18年間継続して行っています。今年度は新たな試みとして，高齢者やリハビリに用いられているノルディックウォークの指導を行っています。ノルディックウォークはポールをつくことで安定性が得られ，なおかつ全身運動のため，筋力の増強が望めます。予防医学の観点（転倒予防，介護予防など）から詳細に分析し，健康寿命延伸に結び付けたいと考えています。

教育の面では，潜在する問題を自分自身で見出し，他者と共有して議論を行い，解決のための取り組みを主体的に実践する力を培う教育を行いたいと考えています。「アクティブラーニング授業法」つまり，学生自らが主体的に学ぶ方法を実践し，問題意識と適切な問題解決能力を有する，人間性豊かな人材を育成していきたいと思っております。

地域の皆様のご協力，ご支援をいただきながら，研究成果を世界に発信し続け，研究を通して「楽しく，歓びをもって」後進の育成，教育に取り組み，地域貢献活動を積極的に行いたいと思っております。

美術館・博物館キャンパスメンバーズ

美術館や博物館には大学等との連携を図り，芸術・文化・歴史を学ぶ場を提供するために「キャンパスメンバーズ」制度を設けているところがあります。この制度は大学等が年会費を納めることにより各種の特典を受けることができるもので，その一つが常設展の無料観覧です。

広島県では2007年に公益財団法人ひろしま美術館が初めてこの制度を導入しましたが，本学もその設立に関わりました。常設展とあわせて特別展も，また，学生だけでなく教職員も無料観覧できるのが大きな特徴です。本学はこの制度の第一号契約校となりました。その後，呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム），三次市美術館（奥田元宋・小由女美術館，はら・みちを美術館，美術館あーとあい・きさ，三良坂平和美術館），広島県立美術館，広島県立歴史民俗資料館，広島県立歴史博物館と続き，2014年には庄原市博物館（庄原市帝釈峡博物館展示施設時悠館，庄原市立比和自然科学博物館）のキャンパスメンバーズ制度に加入しました。また，2013年には公益財団法人広島交響楽協会（広島交響楽団）のキャンパスメンバーズとなりました。広島交響楽団の場合は無料ではなく，定期演奏会のチケット購入割引という特典ですが，広島の文化を支えるために大学もその一翼を担っています。

本学はこれらの大部分の制度創設に協力しています。また，さまざまな機会をとらえて制度の利用促進や施設との連携を図っています。学生の教育面では，新入生のオリエンテーションセミナーの実施，授業等での見学（ミュージアムツアー）や学芸員資格修得のための見学実習，留学生と日本人学生が交流を図るスタディツアー，学芸員や楽団員による特別授業などによる活用，文化施設との連携という地域貢献の面では学芸員と本学教員による連携公開講座，館長による連続公開講演会，サロンコンサートの開催などがその例です。

本学はこの制度を活用して学生に豊かな文化に触れる機会を提供し，学習・研究活動や文化活動の充実に努めていきます。

授業での見学

館長講演会

サロンコンサート

地域連携センター報は本学ホームページにバックナンバーを掲載していますので，ご活用ください。
地域連携センターの活動についても，あわせてご覧ください。
http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/

編集後記

センター報第19号をお届けします。本号では，地域連携センター主催で行ったシンポジウムの紹介を表紙でしました。広島県内の複数の大学教員が連携して行いました。また各キャンパスの研究者紹介，公開講座，産学官連携の総会などの活動を紹介しています。最終頁では，本学が加入している美術館・博物館とのキャンパスメンバーズ制度について紹介しました。今後も地域連携センターとして，教職員，学生の地域貢献をサポートして参ります。 （S・K）

編集発行

県立広島大学地域連携センター
〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目１番71号
電話(082)251-9534／E-mail：renkei@pu-hiroshima.ac.jp
http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター［本号編集担当］
〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地
電話(0824)74-1704／E-mail：gakujutu@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター
〒723-0053 広島県三原市学園町１番１号
電話(0848)60-1200／E-mail：mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp